広島大学教育実践研究センター紀要，1992，第4号，141－148頁

中学校・高校における部活動指導への取り組み方についての調査研究

－運動部と文化部の比較を中心に－

東川安雄・水上博司*

(1991年11月30日受理)

はじめに

学校スポーツ，とりわけ運動部活動が盛んに行われている一方で，部活動に関する問題が多く指摘されてきている。過度の勝利主義，活動の過熱化，運動部からのドロップアウトなどである。これらの問題は，部活動の指導・世話をする指導者，つまり顧問教師の部活動への関与の仕方と深い関係にあると言えるであろう。部活動に関する問題の解決のために，部活動への関わり方の転換が顧問教師に求められているのではないだろうか。

これまでにも，運動部活動に関する問題の解決のためにさまざまな提案が示されてきている。しかし，それにもかかわらず，依然として数多くの問題が指摘され続け，未解決なのはどうしてなのであろうか。指導者自身という個人レベルでは解決できないまでに問題が発展してきているからではないか。例えば，個人レベルの熱意でいくら頑張っても，学校組織や教師集団，中体連や高体連，あるいは競技団体など組織の壁が大きく立ちはだかっており，その壁を改めないかぎり，個人の熱意も実際の指導に反映されにくい面もあるだろう。また，個人レベルの対応に任せておいたために，ますますエスカレートしてきている面もあるのではないかと思われる。森川[2]が指摘するように，「学校の運動部指導者共通のイメージが不明確になっており，運動部顧問教師に学校教育全体のバランス感覚を備えていく必要性が学校教育全体の中で論議され，育てられなければならない。」のである。

ところで，学校の部活動は運動部以外に文化部なども展開されている。したがって，運動部の問題を検討する際には，学校の部活動全体の視野から行う必要もあろう。しかし，これまでの研究などでは運動部のみを対象としており，文化部などとの比較を通して検討しているものはわずかに仙田ら[1]の研究のみである。学校内における取り組み方などを考えた場合，さまざまな部の活動との関連の中でおさえる必要があるのではないか。例えば，多く指摘されている問題はすべて運動部のみに見られるものなのか，それとも文化部などにも見られ，部活動全体の問題なのかの判別も必要になってきているのである。

以上より，本研究は中学校・高校における部活動の活動状況や自己評価などについて運動部と文化部の比較をすることにより，部活動，特に運動部活動のあり方を探ることを目的とするものである。

方法

調査は，以上のような問題意識にたって作成したアンケートを1989年3月に郵送法により行い，回収されたデータをもとに分析した。調査対象者は広島県の中学校，高校の部活動顧問教師1500人であり，有効回答数は758人である（有効回答率50.5%）。なお，回答者の内訳は表1のとおりである。

表1　対象者の内訳（%）

N 人	性別		種類		競技レベル		
	男	女	運動部	文化部	上レベル	中レベル	下レベル
758	74.5	25.5	78.9	21.1	30.2	34.0	35.8

*広島経済大学非常勤講師

結果と考察

1．部活動日数と顧問教師の出席状況

運動部活動に関して指摘される問題点の一つに「オーバートレーニング」がある。これは，過度な勝利主義や一時期にピークを迎えさせようとすることなどと関係があるだろう。

この種の問題は，運動部のみに見られる現象なのであろうか。それに対して，顧問教師はどのように考えているのであろうか。ここでは，活動日数，部員の出席状況，顧問教師の出席状況からその一部を探ってみる。

（1）部の活動日数の現状と望み

表2　週平均の活動日数の現状と望み（%）

		7日	6日	5日	4日	3日	2日	1日
運動部	現状	15.7	52.7	14.5	5.5	3.9	5.0	2.4
	望み	6.8	56.9	23.4	8.0	3.4	0.3	0.7
文化部	現状	3.9	22.4	16.7	9.0	16.0	16.7	14.7
	望み	1.9	21.8	24.4	10.9	23.1	12.2	1.9

「1年365日が練習，休みは正月とお盆だけ」といった活動が多いと言われるが，実際はどうであろうか。

表2は，週平均の活動日数を比較したものである。運動部の場合，週6日間練習している部が約半数になり，週5日間以上の部が82.9%になる。一方，文化部の場合，特に答えが集中する日数もなく，活動日数が分散し，部によってまちまちであることが分かる。その中でも運動部と比較して，週1～3日程度しか活動していない部が約半数の47.4%にもなる。

さらに，顧問教師が望ましい考える週平均の活動日数を見てみる。全体的には，現状と同様に運動部の顧問教師の方が多くの活動日数を考えている。

次に，現状と望みを比較してみる。運動部の場合，現状と比べて休みなしに相当する「7日」の割合が少なくなり，週4～5日の練習を考える顧問教師が多くなる。一方，文化部の場合，約3割もあった週1～2日程度の部の割合が半減し，全体的に現在よりも活動日を多くしようとする傾向にある。しかし，運動部のように週4～5日の割合はそれほど増えず，活動日を単純に運動部並みに増やすことには何らかの抵抗があるのであろうか。

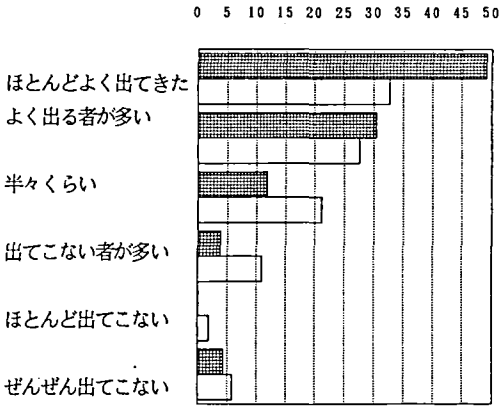

図1　部員の出席状況（%）

表2で見たように，活動日数で運動部と文化部の間には著しい差が見られた。では，活動日に部員はそれぞれどの程度出席しているのであろうか。

図1のように，全体的には出席率のよい部が多い。しかし，運動部と文化部を注意深く比較してみると若干の差が見られる。運動部では出席率のよい部（「ほとんどよく出てきた」と「よく出る部員が多い」を合わせて）が約8割であるのに対して，文化部では約6割程度でしかない。一方，出席率のわるい部（「出てこない部員が多い」と「ほとんど出てこない」と「だんだん出てこなくなる」を合わせて）を見てみると，文化部（18.6%）は運動部（8.3%）の2倍以上になる。週平均の活動日数が多い運動部に出席率のよい部が多く見られ，活動日数が分散し，あまり多くない文化部では，出席率のわるい部の割合が高くなる傾向にある。継続して定期的に活動することが，部員の出席率を高めることにつながるのであろうか。それとも，出席率が高くなることで，活動日数がだんだん多くなっていくのであろうか。

（3）顧問教師の出席状況

活動日数や部員の出席状況の異なるそれぞれの部の活動に対して，顧問教師はどの程度参加しているのであろうか。活動日は必ず参加しているのか。

図2のように，運動部と文化部の間にはほとんど差が見られない。「出た日の方が多い」顧問教師が約半数，「出れない日の方が多い」顧問が約3割である。部の活動日数や部員の出席状況から見ると，教師の一般的特徴である「多忙」の状況にあってか，指導する機会をかならずしも十分に

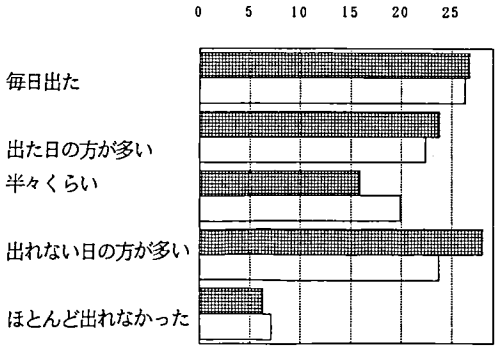

図2　顧問教師の指導状況（%）

とれないことがあることを物語っている。

ところで，図3は夏休みの指導日数の結果である。全体的には平日よりも週平均の活動日数は多くなっているが，運動部と文化部の差はさらに大きくなる傾向にある。運動部の場合，半数以上の顧問教師が「毎日」指導にあたっている。1日おき以上に指導している者は87.3%にもなる。ふだんの活動日数よりも頻度が多くなっていることがよく分かる。一方，文化部の場合，「毎日」は19.9%であり，月に1～2回程度以下しか指導していない顧問教師は，28.3%にもなる。特に1回も指導しなかった顧問が18.0%もいることは驚くばかりである。

ここにおいても，同じ学校内において展開されている部活動でありながら，運動部と文化部の間にアンバランスが生じていることがよく分かる。教育課程外の活動として位置づけられている部活動であるだけに，部活動日数などを統一していくことの困難差があるのかもしれない。しかし，このようなアンバランスが運動部における過度な勝利主義を認め，あるいはスポーツ障害などを発生させ，さらにはバーンアウト現象やドロップアウト現象を生じさせているのではないだろうか。したがって，さまざまなアンバランスを当然のこととせず，よりよい展開が行われるように学校全体の中で見直すことが必要になってきていると思われる。部活動をクラブ活動の代替とすることができるようになった新指導要領を考えた場合，その必要性はさらに高まってきているのではないだろうか。

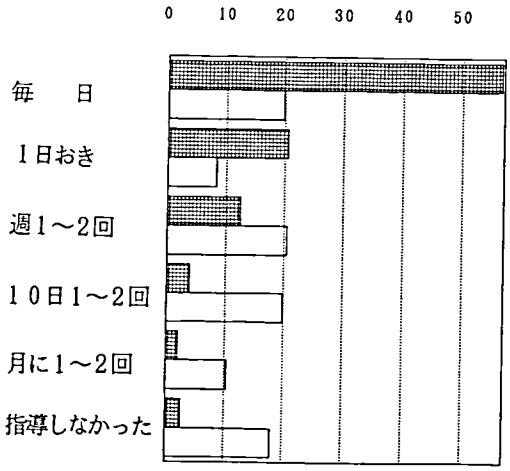

図3　夏休みの指導（%）

2．部活動指導に対する自己評価

（1）部活動指導の満足度

部活動の活動状況において顕著な差が見られた運動部と文化部であるが，実際指導にあたっている顧問教師は活動日数の多少にかかわらず思うように出席できない状況にあると言える。このような状況の中で指導している顧問教師は，ふだんの指導に対してどのような評価をしているのであろ

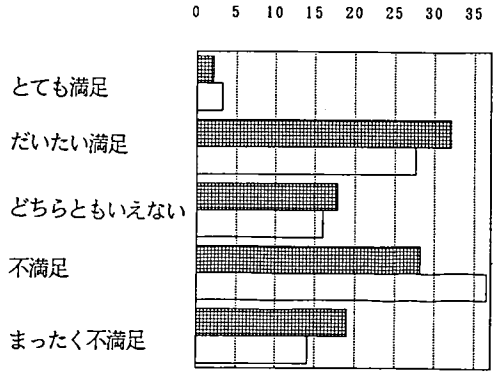

図4　技術指導の満足度（%）

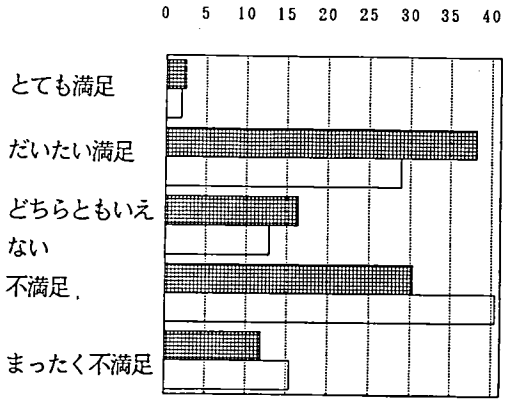

図5　運営の満足度（%）

うか。

本研究では，指導場面を練習や活動の技術指導面と部にかかわる世話などの運営面に分けて自己評価（満足度）してもらった。図4，5はその結果である。

まず，技術指導面について見ると，満足と不満足に意見が分かれるが，全体的に不満足とする者の割合がやや高い。運動部と文化部を比較してみると，文化部において不満足とするものが約5割になるのが注目できる。また，運動部の顧問教師の約2割が技術指導に対して「まったく不満足」としていることも興味深い結果である。

次に運営面について見てみる。全体的には，技術指導面の結果と同様に不満足とする顧問教師の割合がやや高い。しかし，運動部と文化部の間にはかなりの差が見られる。

運動部の場合，満足とする者と不満足とする者がほぼ半々である。これに対して，文化部の場合，不満足とする者が55.8%にもなる。また，「とても満足」と「まったく不満足」の割合の差を見てみると，運動部では1.6%であるのに対して，文化部では約15%にもなり，運営面での悩みが推察される。

以上，部活動指導の満足度を技術指導面と運営面から見てみた。全体的には，満足層と不満足層に評価が分かれる傾向にある。また，運動部と文化部を比較すると，満足層と不満足層の割合の差において顕著な差が見られる。運動部では，技術指導面でのその差が大きいが，運営面ではかなり小さくなる。一方，文化部の場合，技術指導と運営の両面において不満足層の割合が高く，その差は同様に大きい。

これらの結果から考えられる問題としては，第1に顧問教師のかなりの者が，かならずしも満足のいく部への関わり方ができていないということである。現在の教師の置かれている状況を象徴する「忙しさ」がその原因なのか。それとも，専門外の部を指導しなければならないというシステムの問題なのか。

（2）学生時代の部活動経験

部活動指導の自己評価の結果から考えられる第2の問題点は，科学的な指導法に関することである。

最近，部活動の顧問を引き受けることに困難を示す場合があると聞く。なかには，顧問のなり手がいないために，これまで続いてきた部活動を中断せざるをえないという最悪の事態まで生じてきているという。

なぜ，このような状況が生じてしまうのか。さまざまな条件が関与しているであろうが，前述の「忙しさ」もその重要な要因の一つであろう。もう一方で，勝利への執着が生む，スペシャリストとしての顧問教師の位置づけが関係していないだろうか。例えば運動部の場合，将来につながる指導が必要であるとは言われるが，実際にはそれぞれの学校期にピークを合わせた指導が中心となり，本来あるべき姿から急速に離脱してきているのが現状である。このような状況に置かれた顧問教師に求められるものは，それまでの基礎的なことに止まらず，競技力を向上させるためのさまざまな専門的知識や技術であろう。その専門性をどの程度身につけており，いかに発揮できる状態になっているかが指導者として問われるのである。その状況に指導者は追い込まれているのではないか。指導者が相当のプレッシャーを受ける時代になってきていると言える。

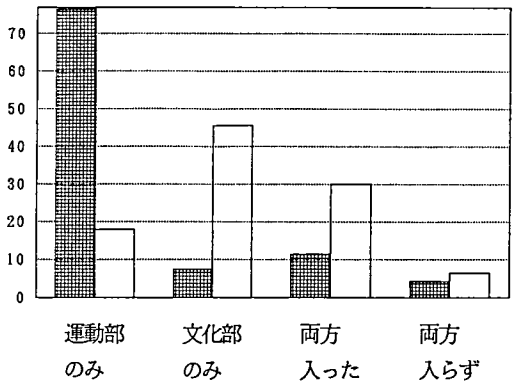

図6　顧問教師の部活動経験（%）

このような状況の中で，指導者のよりどころとなるものが学生時代の経験であろう。図6は，本調査の回答者の学生時代の部活動経験を見たものである。9割以上の者が部活動を経験している。経験してきた部の種類を見ると，運動部の場合，約9割の者が運動部に所属したことがあり，そのうちの約8割は運動部のみの経験者である。一方，文化部の場合，約8割の者が文化部経験者であるが，そのうち文化部のみの経験者は45.5%でしかない。

運動部と比較して，文化部の顧問教師には文化

部一筋の人が少ないと言えよう。その経験の少なさが部活動指導の自己評価における不満足層の多さに影響を及ぼしているのであろうか。一方，運動部の場合，大部分の者が運動部経験者でありながら，技術指導面で不満足が多いのはどうしてであろうか。現在の指導で求められているものが，その経験では対応できないところまで進展してきているということであろうか。また，過去の経験の内容が現在の指導に生かすことができない程度のものであるということか。もし，そうであるならば，運動部活動において科学的な練習内容を採用するとともに，その科学的な内容に含まれる知識と技術を部員たちが学習できるような指導がこれからの運動部に望まれると言えよう。

3．部活動に関する問題への取り組み方

（1）練習計画の立て方

図7はそれぞれの部の活動・練習計画をどのようにして決めているかを見たものである。全体的には，顧問教師と主将で話し合って決めている部が多い。

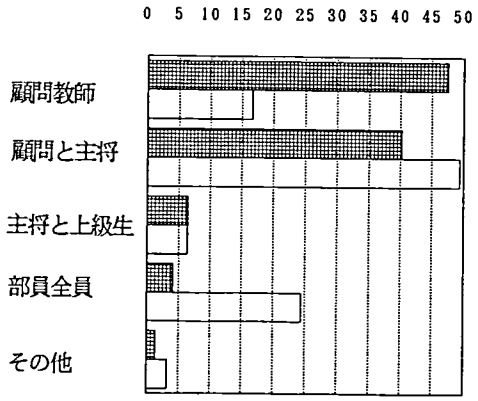

図7　練習計画の決定者（%）

運動部と文化部を比較してみると，運動部の場合，顧問が決める部が47.5%と第1位である。次いで，顧問と主将で決めている部が続いている。両者を合わせると，練習計画の決定に顧問教師が中心的に関わっている部は約9割にもなる。一方，文化部の場合，運動部の結果で最も多かった顧問が決める部の割合が16.7%と約1／3程度でしかない。顧問と主将で決める部が最も多く（49.4%），また，部員全員で決めている部も24.4%と多いのが特徴的である。部員が何らかの形で活動の計画の決定に関わっている部が全体の約8割になる。運動部と文化部ではまったく異なる傾向を示しているのである。

運動部と文化部では活動内容も活動に関わる条件も異なるであろうが，部員の関わり方のこれほどまでのギャップは何を意味するのか。

運動部の練習の科学化と運営の民主化に関係するであろう。スポーツの熟練過程にはさまざまな科学的根拠がある。したがって，練習を展開する際には，この科学的な根拠・理論を踏まえ，部員の実態に応じた内容を計画する必要がある。しかし，その内容によってはかなり高度なものがあり，そのすべてを部員が理解し，計画化することの困難さがある。そのために，ややもすると顧問中心に練習計画が決定されることになるのであろう。しかし，はたして部員にはトレーニングなどについて科学的な理解をする力や計画を立てる力が不足していると言えるのであろうか。

ところで，図7のような結果は，顧問教師が学生時代に経験した運動部にも当てはまるのであろう。むしろ，その傾向はより顕著であったかもしれない。その経験が現在の部活動指導に再現されているのではないか。図6で見たように，運動部の顧問教師の大部分は学生時代に運動部一筋で過ごしてきている。その学生時代に身につけた顧問教師と部員との関係や練習計画の立て方をモデルとして現在の指導のよりどころにしているのである。

文化部の顧問教師の結果から見ると，部員が練習計画や運営に積極的に関わることは可能であると言える。運動部においても，ぜひ採用してほしいものであり，学校全体の中で検討する必要があるであろう。

（2）部活動の指導観

忙しさや得意・不得意などのさまざまな条件に囲まれながら活躍している顧問教師は，部活動指導についてどのような考えを持っているのであろうか。本研究では，久富ら[3]の教員文化の研究を参考にして4つの指導観を設定し，調査対象者に7段階（「大いにそう思う」から「まったくそう思わない」）で評価してもらった。

表3のように，全体的には各項目とも肯定的な結果となっている。運動部と文化部を比較すると，文化部の場合，「子どもに接する喜び」や「やりがい」に比べて，「気苦労」や「自己犠牲」の割合が約6割程度に減少するのが特徴である。一方，

表3　部活動の指導観（%）

	やりがい	気苦労	自己犠牲	子どもに接する喜
運動部	83.4 (33.7)	74.4 (20.9)	77.7 (27.5)	93.5 (39.3)
文化部	74.4 (19.2)	62.9 (15.4)	62.1 (12.8)	86.5 (28.2)

＊　やりがい：やりがいのある仕事だ
　　気苦労：気苦労の多い仕事だ
　　自己犠牲：自己犠牲を強いられる仕事だ
　　子どもと：子どもに接する喜びのある仕事だ
　　接する喜び
＊（　）内は，「大いにそう思う」の割合。

運動部の場合，各項目とも肯定的な意見が多い。特に「大いにそう思う」の割合のみを抽出してみると，その傾向がさらに特徴的である。3～4割の者が「やりがい」や「子どもに接する喜び」に強く肯定的な姿勢を示している。これに対して，前2項目の反対意見になる「気苦労」や「自己犠牲」においても2～3割の者が「大いにそう思う」としているのである。運動部の顧問教師の場合，やりがいもあり，子どもに接する喜びを味わえる場として高く評価しながらも，気苦労が多く，自己犠牲を強いられることが多いと思っている者が相当数存在するということになろう。その傾向は文化部の顧問教師の場合よりもかなり顕著であると言える。

これまで検討してきた各項目の結果と関連して考えてみる。運動部の場合，学生時代の運動部経験も豊かであり，その経験を生かせることから「やりがい」を感じ，また授業などとは異なった喜びを味わえる場として積極的に関わってはいるが，指導が過熱すればするほど，気苦労も多くなり，日曜日や夏休みの指導，多額の出費などの自己犠牲をしてまで関わらないと思うような指導ができないという実態を示すものであろう。

以上のように，中学校・高校で展開されている運動部活動について文化部との比較を通して見てみると，さまざまな問題が浮かび上がってくる。それらの問題にいかにして取り組むかが今問われているのではないか。これまでは，学校教育における部活動の位置づけも関係して，それぞれの問題は顧問教師個人あるいは担当する部の問題として投げかけられてきた。しかし，今回の調査結果でも見られたように，問題が複雑化してきている現在においては，顧問教師個人レベルの努力だけでは根本的な問題解決になりにくいのではないか。学校内において展開されていることから考え，学校全体の問題として取り上げ，取り組む時期に来ているように思われる。職員会議や顧問会議などこれまでよりも公的な場において検討されることが望ましいであろう。

結　語

さまざまな問題が指摘されている中学校・高校の運動部について，学校全体としてどのような取り組み方が望まれるのかを探る資料を得るために，活動状況や顧問教師の自己評価などについて，同じ学校内で展開されている文化部との比較を通して検討してきた。以下，簡単に要約してまとめとする。

（1）同じ学校内で展開されている部活動でありながら，運動部と文化部では活動状況や部員の出席状況に関して大きなズレがあり，アンバランスが生じている。教育課程外の活動としての位置づけが関係しているかもしれないが，このアンバランスの容認が，運動部におけるさまざまな問題に影響を及ぼすだけに，学校全体の中で見直す取り組みが必要になってきていると言える。

（2）部活動指導の満足度を見ると，運動部では，技術面で満足層と不満足層の差が大きいが，運営面ではかなり小さくなる。一方，文化部の場合，技術指導と運営の両面において不満足層の割合が高く，その差が大きい。

（3）練習計画の立て方では，運動部の場合，顧問が中心的に関わっている部は約9割にもなる。一方，文化部の場合，部員が何らかの形で活動の計画決定に関わっている部が全体の約8割である。部員の関わり方のこれほどまでのギャップは，運動部の練習の科学化と運営の民主化に関係する問題である。

（4）部活動の指導観を見ると，運動部の顧問教師の場合，やりがいもあり，子どもと接する喜びを味わえる場として高く評価しているが，気苦労が多いと思っている者が相当数存在することが推察される。その傾向は文化部の顧問教師の場合よりも顕著である。

以上，限られたデータではあるが，学校における運動部活動の取り組み方に関する基礎的な資料を得ることができた。今後は，事例研究なども含め，詳細な分析を重ねていきたい。

最後に，本研究で使用したデータは広島県内の中学校・高校の顧問の先生方のご協力により得られたものである。ここに感謝の意を表する次第である。

参考文献

1）仙田雅俊・荒井貞光・池田二三夫「運動部と文化部の比較研究」日本体育学会第34回大会号，1983.

2）森川貞夫「期待される部活の指導者像」体育科教育，36-3,1988.

3）久富善之「教員文化の社会学的研究」多賀出版，1988.

4）荒井貞光・平松　携・柳原英児・東川安雄・冨永徳幸・水上博司「中学校・高校における部活動指導への取り組み方についての調査研究」昭和63年度広島県体育協会スポーツ医・科学委員会報告書,1988.

A Study of the Management of Sport Club in Junior High School and High School

− On the Comparative Analysis with " UNDOUBU " and " BUNKABU " −

Yasuo HIGASHIKAWA and Hiroshi MIZUKAMI

The present study is aimed at the difference in the management between " UNDOUBU " and " BUNKABU " in junior high school and high school.

The following are the findings.

1. There is a difference in the days of exercise between UNDOUBU and BUNKABU.
2. As for the degree of satisfaction of coaching and management, in UNDOUBU, there is a extensive disparity in percentage between satisfaction and dissatisfaction in coaching, but there is a narrow disparity in management. In BUNKABU, there is a extensive disparity in it both coaching and management.
3. In UNDOUBU, The most of coacher take part in the planning of exercise, but in BUNKABU, the most of member take part in it.